

“食”の勉強で子どもたちを変える！？

～学年で取り組んだ健康教育～

1 学年の問題を健康教育で乗り越える？！

毎年健康教育の実践をしてきた自分にとって、学校で職員の前で堂々と「実践をしているんだ！！」ということが言えず、どこか罪悪感のようなものがあつた。それはいつも学校では自分一人だけが実践をしていたからだと今になって振り返って感じる。もちろん、学年の先生には「こんな実践します」や、「一緒にしてみませんか？」と伝えてきた。いいよという返事ももらい、概ね肯定的に受け取ってもらっていたように感じるが、一緒に取り組んでもらったことはなかった。上野山先生をはじめ、いろいろな人にアドバイスをもらい、支えてもらってきて実践をすることができた一方で、次の授業の展開をどうしようかはいつも一人で考えてきた。そういう意味では集団研究が十分にできていない実践ばかりを積み重ねてきたと感じる。

5年からの持ち上がりの子どもと学年集団で初めての6年生を担当し、クラスの中には4年目の関わりを持つ子も何人かいる。

「足跡」をテーマに学年目標を決め、運動会や行事のほとんどを自分がやりたいことをやらせてもらえた、理解ある学年の集団であ

つた。そんな中で、あるクラスで特定の子を傷つける落書き事件が11月ごろに連続して起き、また12月にも落書きが起きた。いずれも誰がやったのかが全くわからず、担任も学年も対応に困った。事態を重く受け止め、そのクラスには“見守り”と称した職員を担任にプラスして配置し(ほとんどは算数少数人数の先生で、管理職もよく来た)、すき間の時間を作らないように見守りを続けてきた。その対応に追われる担任を支えようと話を聞いたり、できる仕事は代わりに行ったりと、サポートの体制を模索した。一方で、落書きの被害を受けた保護者からは、「学校としてどうしていくのか」と問い詰められ、学年として学校として、保護者を納得・安心させる十分な対策が出せないことにもどかしさを感じ、ただただ保護者の話を聞き、気持ちを落ち着かせてもらうことしかできなかった。

「楽しい行事を増やして明るい思い出を増やす」「楽しい授業をして子どもたちを前向きに」といった取り組みをずっと担任も意識して行い、また学年としてもできる限りのことをしてきた。しかしなかなかクラスの雰囲気は変わらず、子どもたちからは「おれら見張られているよな」といった声も聞かれ、教師に対する不信感も高まっている子もいた。このクラスだけが問題を抱えているといわけではなく、他のクラス(もちろん私のクラ

スも含めて)でも、子どもたちのことで気になることや課題があったが、なかなか相談することができずにいた。行事に追い立てられ、6年生の担任がこんなにも忙しいのかとを感じるくらいの仕事量(みなさんはどうでしたか?)で、子どもの話や学級の相談などは二の次になってばかりだった。12月の下旬、保護者との個人懇談が終わって学年で一年の労を労っていたとき、フツフツと自分の胸にある思いが膨らんでいった。それは、「しんどいけれど、こんな時こそ授業を大事にしよう!そして子どもを変えていこう!」という思いであった。そして、健康教育こそがその思いを叶えることができる!とこみ上げてきた。そして、学年の先生にお願いした。「忙しいけれど、授業をしましょう!そして学年会で授業や子どもの話をしましょう。」

3人の先生からも「やりましょう!」という返事をもらい、学年で実践に取り組むことが決まった。子どもの暗い雰囲気や気まずい関係を、授業を通して変えていけるようにという願いを持って実践を行った。

2 実践の経過

実践をするということは決まったが、具体的にどのような実践をするのかはなかなか決まらなかった。ただ、中心にしたかったのは落書きを受けたクラスの子どもたちだった。クラスが前向きに変わっていけるような、そんなテーマを探しているときに、そのクラスの担任から「“食”が気になる」という話題があった。給食の残量が多い事、クラスに

I型糖尿病の女の子がいて、その親子とあまり関係がうまくいっていないことなど、いろいろな思いがあつての“食”というキーワードだと感じた。同時に、どの子どもたちにも深いつながりのあるキーワードでもあるので、“食”を考える実践にすることに学年全員で合意した。

具体的な文章などでどのような実践にしていくかを細かく決めたわけではないが、実践を通して全員発表することができるような楽しい授業がしたいという3年目の女性の担任からの願いや、クラスで課題のある子どもも参加してつながりを深められるようにと学年主任から思いを受けた。そして、“食”を通して教師と子どもの関係を深め、子ども同士のつながりを深めることができるような実践にしようと決めて取り組むことにした。そういう意味では具体的な学習目標は文章化することができず、目標のない実践と言われてしまうかもしれないが、4人の中にはこの目標が常に頭の中にあつて計画を立てていった。以下全5時間の学習の流れである。

<1時間目>

◎食べ物の好き嫌いについて交流しよう

○好きな食べ物・嫌いな食べ物のアンケート結果を考えよう

○好きな食べ物を仲間わけしよう

<2時間目>

- ◎食品の“輸送”について考えよう
- 和風幕の内弁当は和食だと思いますか？
- 弁当の食材の輸送距離を知って感じたことを考えよう

<3時間目>

- ◎なぜ外国から食材が届けられるのか？
- 外国からの食材を輸入している理由は？
- チョコレートも知らず、一生力カオ農園で働き続ける兄弟のDVDを見て

<4時間目>

- ◎食べ物を通して世界を見つめよう（飢餓）
- ハンガーマップを見て
- どうして飢餓が起こるのか？



<5時間目>

- ◎食べ物を通して日本を知ろう（食品ロス）
- 日本の食べられない食べ物の行方…
- 食品ロスを減らす取り組みのビデオを見て



3 実践を終えて

今回の実践を振り返ると、自身の中には消化不良でうまくできなかったことばかりが残る実践となった。

①学年で決めた目標は達成できたのか？

実践を始めたころの授業では、好きな食べ物のランキングを発表し、交流し合うなかで全員発表することができたり、楽しんで授業を受けてくれたとどのクラスの担任からも聞いた。また、コンビニ弁当の食材を考える学習でも子どもたちから様々な反応があって授業をしていて楽しかった。毎回の授業で振り返りを書いてもらい、次の時間の最初に交流することで、ほかの子の意見を読むことで学びあえる学習をどのクラスでもできたことは良かった。

しかし授業の後半で取り扱った飢餓問題や食品ロス問題の学習では、どちらかというとして座学に近い学習になってしまい、子どもた

ちの活発な議論などをする時間が少なくなってしまう。たしかに学年で検討し、できる限りの資料を用意して授業を行った。しかし、「どうして飢餓が起こるのか？」という問いに対してビデオを見ながら考えてもらった。子どもたちからは様々な意見が出たが、格差社会や国際社会の在り方に言及できるような資料を用意できなかったからこそ、十分な話し合いや盛り上がりには欠けてしまったのではないかと考える。同じように、食品ロスについても子どもたちに提示した資料はいろいろと考えたが、食品ロスを減らす取り組みとして紹介したスーパーなどの取り組みはどちらかというと自己責任論的な話になってしまうことになり、食品ロスを生み出す日本の現状や世界との比較があればもっと子どもたちは考えることができたのかなと感じた。実践をする中で、「世界に目を向けていきたい」といった方向性の中、実践の方向性を決めてきたが、もっと教材研究をしっかりと深め、子どもたちに提示する資料を吟味していくことの大切さを改めて感じた。また、事前に子どもたちや保護者の方にアンケートをしてもらった結果などをうまく授業や学習に活用しきれなかったことも心残りであった。

②子どもたちは変わったのか？

1月の終わりから始めた実践で、卒業前の大変忙しい中で取り組んだ。具体的にこの子がこんな風に変った、クラスがこのように変わったと感じることが少なかった。特に落書き事件があったクラスでは、この実践をしている途中の2月にまた同じ子を傷つける

事件があり、クラスの雰囲気もどんどん沈んでしまった。それに関連してLINEでのトラブルやリストカットなど、学級内の問題が頻発した。この実践が少しでも子どもたちの前向きなエネルギーに昇華できるようにと願っていたが、うまくいかないことが続き、担任をはじめ学年としても悩みが尽きなかった。

それでも、実践の最後には学習したことを振り返るためにも、家からおにぎりを1個つくってきて、みんなで食べようという企画を行った。卒業の2日前に学年で茶話会を開き、その最後に学年全員で大きな輪を作り、みんなでおにぎりを食べた。お家の人に作ってもらった人、自分で作ってきた人など様々で、好きな具材を入れて持ってきたおにぎりを食べながらいろいろな話をしながらも、どこか味わって食べているのが印象的だった。

③自分のクラスを振り返って

家庭環境が複雑で自尊感情がとても低く、クラス内で友達関係を作るのが難しいMさんは、この食の学習をするときは「これは楽しいねん！」と言いながら学習に取り組んでくれた。算数や図工、体育など自分を表現することや難しい課題を考えることが非常に苦手であるが、振り返りもしっかり書いて出してくれた。チョコレートの学習では「(ガーナの)そういう子どもたちがいっぱいいるのに、私たちは楽な生活を送れて幸せだと思った」や、飢餓の学習では「(フランスで食料が)あまるぐらいだから、飢えている子にあげたらいいんじゃないと思いました」と書いてくれたので、クラスでも紹介した。普

段家でもご飯の用意や洗濯をたたむなど、家事を手伝っているMさんにとってはコフィくんたちの気持ちは十分に伝わったのかなと感じた。一方で、給食では好き嫌いが激しいので、この実践を通しての変化はあまり見られなかったが、楽しんで学習に取り組んでくれたことが何よりだと感じた。

クラスとしての盛り上がりを感じたのはやはりコンビニ弁当の学習の時だった。身近に関わる話題だったので、子どもたちがすごく意欲的だった。「和風幕の内弁当は和食か？」という問いの第一印象では34人中24人もの子どもが和風と答えていたのに、1時間の学習が進むたびにどんどん「和食じゃないやん！」「外国からの食べ物ばかり！」といった声が飛び交い、最終的にはほとんどの子が和食ではないと答えた。ただ、Tさんを含めたほんの数人が最初から和食じゃないと答えていた。その子の振り返りには「その弁当に和風とか書いているけど、ほとんど外国産でちょっとだまされてるみたいです」と書いてくれた。5年で学習した水俣病の学習の時にも、チッソの会社は悪い！と強い反応を示していた子である。物事の真実を見てしっかりと自分の意見を持つことのできる強い子だったので、今回の学習でもしっかりと見抜けたのではないかと感じた。

本当は自分のクラスだけでも取り組みたかったこと。それは、食品ロスの学習の振り返りを書いているときにFくんが「なんかできることないかな」とつぶやき、男子の数人で話していた。Fくんの振り返りには「食品ロスを減らすためには自分のできることを1つでも見つけて、それを実行するのが大

切だと思いました」と書いてくれた。この話と振り返りを見て、通信では食品ロスを減らすために自分ができることを決めて、取り組んでもらおうと子どもたちに話した。

しかし、卒業1週間前で予告したために十分な時間も取れず、子どもたちがどんなことを書いて、どんなふうに取り組んだかを聞きまとめることができなかった。もっと時間があれば…とたいへん後悔したものの、子どもたちにはそんな風に前に進むエネルギーがあるんだという事を再確認することができた。子どもたちには常日頃「自分で考えて行動する」ことの大切さを話してきた。子どもたちなりにこの学習を受けてしっかりと考えてくれたのかなと今になって思う。

④それでも実践をして良かった！

思い返すと大変拙い実践で心残りは多々あるが、それでも学年4人が一緒に授業をやる！と合意し、卒業前にもがきながら実践を考えることができたのは本当に幸せだったと感じる。

この実践をするまでにいろいろと学年で話し合ってきたが、これまではどちらかという生徒指導的な話し合いや学年会が多く、行事に追われて話し合いがしんどいと感じる時もあった。たしかにこの実践中もとても忙しくて大変だったが、生指の話よりも教材の話の方がモチベーションが上がるという話を学年の先生からもらうことができた。

また、実践するにあたって資料やビデオなどを一緒に作ってもらうことができた。今までならほとんど一人で行ってきた授業準備も、自分のほかに3人いるととても心強かつ

た。また、どのクラスも授業の振り返りを書き、通信として発行する取り組みをしてくれることになった。そこで、子どもに書く感想用紙を工夫し、省エネで通信を発行できるようにアイデアを出し合った。

本当に忙しかった卒業までの3か月だったが、学年で団結して少しであるが実践を残せたことに感謝し、次への実践のエネルギーとしたい。また、私たちの食に対する安全安心が広がっていくよう、高い関心を持ってこれからの子どもたちへの指導に返していきたい。